

カーシカル出版・翻訳

バラドヴァーージャのシュラウタ、パイト

リメーディカ、パリシェーシヤ・スートラ

辻 直 四 郎

黒ヤジュル・ヴェーダに属するタイッティリーヤ派には、一具の祭式綱要書（カルパ・スートラ）によつて区別される多数の支派、すなわちスートラ・チャラナがあつた。その中、最も古くかつ特殊の地位を占めるパウダーヤナ派に対し、他の支派（ただし古風な断片により知られるヴァードウーラ派を除く）を、新タイッティリーヤ派と呼び、バラドヴァーージャ派、(Bh) アーパスタンバ派、(Ap)、サトヤシャード・ヒラマケーシン派 (H) ならびにヴァイカーナサ派 (V) によつて代表される。Bh 派のグリフヤ・スートラ（（家庭的祭式の綱要書））は、H. J. W. Salmons 女史によりつとに刊行されたが、(1913) 故ラグ・ヴェーラ教授によつて始められたシュラウタ・スートラ（（三聖火を要するヴェーダ祭式の綱要書））の刊行 (I-XII. 6. 9: Ap. XI. 6. 3, 1934-35) は、現存する資料の全貌を示すにいたらずして中絶した。ピトリメード・スートラ（（葬儀の綱要書））については、W. Caland の研究により、Ap 派或いは特に H 派のそれと酷似することのみ知られながら、写本の不備のためまだ公刊される

なかつた。今カーシカル博士は、現存する資料の許すかぎり批判的に、シュラウタ・スートラ (Sr) とピトリメード・スートラ (Pm) とを出版・翻訳し、重要な補遺文献パリシェーシヤ・スートラ (Pa) をもここに始めて刊行・翻訳して、Bh 派のスートラ文献に対するわれわれの知見を著しく豊富にした。博士が Śrautakōśa 第一卷英文部第二部の序文 (p. 2, n. 1; p. 8, n. 1)（（東洋学報四六卷四三四頁参照））に述べられた公約を、かくも速かに実現されたことは、ヴェーダ祭式の研究のため慶賀に堪えない。

以上の三スートラに関しては、著者の序文に詳説されているが、博士の学界に対する寄与を理解するため、次にその概要をしるす。まず Śr について見るに二群に分かれる合計八種の写本 (Introd. p. xxxiii-xli) を校合し、上記既刊の部分を参考として I-XV. 4. 7 (: Ap. XIV. 10. 6) + 5. 1 すなわち Jyotiṣma-brāhmatva の中途までを出版した。内容の配列を暫くおけば、（はば Ap I-XV (Pravargya を含む) に相当する。） (p. lxxxix-lxxxii) Ap および H 派の Śr との密接な関係から見て、現存部分とはほとんど同量に近い部分が散逸したものと推定され、注釈文献に残る引用文に照らしても、未発見の部分の少くないことを知る。(p. lv-lx, cf. Appendix A = p. 271-8)。

Pm (資料に関しては p. xxxv, xxxix 参照) は「二巻か

らなり、H・9・12は後世の追加である。Bh・Āp・H三派のPmがその内容をほとんど共通にすることはすでに知られていたが、三者の關係はここに一層明確になった。著者は広く注釈文献を渉獵し、Āp派もH派とともにBh派のPmを借用し、後に各自のカルパ・スートラ中に編入したものと主張する（p. XLIV-L）。これにより今まで明確を欠いた点も解決され、かつBh派の年代的先行を認めるインドの伝承に支持を与える結果となった。

最後にPa（資料に関してはp. XXXV-VI, XXXIX-XI参照）は、一二二条の規則からなり、半数はŚr本則に対する補遺、残りの大部分は祭式の一般規定（parihāṣa）の性格をもつ。前者はパウダーヤナ派のŚrを予想し、後者はĀp派の一般規定とおおむね一致する。始めて公刊されたこのスートラは、ただ一人の手になつたものではないが、内容に注目すべきものがあり、特に *Atipavitreṣṭi* (202-209) は他に典拠をもたない（p. LXXXIX, cf. *Srauta* I, Engl. sect. pt. 2, p. 2）。散逸部分に関する補則も多々、これによつても完本としてのŚrの規模を想定し得る（p. LXXXV, LXXXVIII-XCI）。また注釈家はPaを引用するに際し、これとŚr或いはPmとの間に何らの差別を設けず、三者に同等の權威を認めてゐる（p. LIV-V, XC-XCI）。

言語の上から見て、Bh・Āp・H三派のŚrが顯著な類似を示

すことは周知の事実であるが、他方においてBh派のシュラウタ、グリフヤおよびビトリメーダ・スートラ（一一・五）の間には、語法・用語に共通点が見いだされる（p. XLIII, LI, LX-LXX）。カーシカル博士はこれにより、バラドヴァージーヤ（名称についてはp. XL-XLI, p. LI: § 6 in fine 参照）に帰せられるこれら三スートラを同一学匠の著作と認めてゐる（p. XLIII, LI）。ヴェーダの学派にはそれぞれ言語的特徴があり、同一学派内には長く伝統が保持されたことを思へば、文法・語彙の親近性のみから、著作者を同一人と断定することは必ずしも常に安全とは言えないが、この場合は、カルパ・スートラ組織の中にあつて緊密に關係しあう三スートラを同一人に帰することに反対すべき積極的根拠は存在しない。

以上によつても明かである通り、序文は特筆すべき多くの点を含んでいる。例えば上述のPmに関する論述（p. XLIV-L）は、資料の増加に支持されつつBh派のPmの優先を確認して従来の研究を進展させ、Paの内容を正確に紹介し（p. LXXXV-XCI）、広範囲に探索してBh派の諸書からの引用を蒐集し（p. LI-LX, cf. *Append. A, B*）、Bh派の諸書に挙げられる学派・学匠の名・典拠・異説（*iti vijñāyate, brāhmaṇavyākhyāta, yathāsamāmāta; ekam.....aparām, eke*）の所在を一表に収め（*Index A = p. 280*）、ĀpのŚrに

しばしば見える Vajasaneyaka, Vajasaneyin の各一回も現われないことを指摘し (p. LXVI, LXXXIII) ことに意見の対立した二学匠 Āsmarathya と Alekhana とについて精査したこと (p. LXVII-LXXVI, cf. p. LXXXIII, LXXXVIII in fine) 等は推称に値する。ただし古代インド文献の常として、引用者の態度に徹底的統一・合理性を求めることは困難である。各スートラ作者は自己の便宜に従つて任意に引用し或いは黙殺したと考へ得るから、数名の Āsmarathya や Alekhana を仮定することには賛同しがたい (contra: p. LXXIV-V)。

最後に B^p 派のとの関係年代に論及し、著者は Bodhāyana — Bharadvāja — Āpastamba の序列を肯定し、かつすべて Pāṇini 以前と認めて、それぞれに凡そ B. C. 800—650-600—550 の年代を推定している (p. XCI-V)。この B^p 派の故郷を、根拠ある理由に基づいて北インドに求めている (p. XCV-VI)。Āp 派との地理的關係は必ずしも簡単に断定し得ないとしても、後世の分布状態とは別に Āp 派もまたその起原においては北印を故郷としたことは、評者が年来抱つてきた持説とも合致する。

第二部の訳文はヴェーダ祭式に精通する学者の筆になるものであり、よく意をつくすに努めたあとが伺われる。注記は主として Āp 派の Śr に参照するほか、時には長文のものをまじ

え (e. g. p. 4, p. 147, p. 316-7, p. 407, p. 457) 語義・行祭の理解に寄与する。なお第一部巻末の Index B (mantras) と Index C (words) の作成に払われた著者の労力は感謝に堪えない。殊にこのスートラ語彙の研究に多大の便宜を与える。

第二部の末尾に添えられた 'Errata' は必ずしも完全ではないが、その他の誤植は通説に際しておおむね容易に是正され得るものであるから、ここには挙げない。多数にのぼる出典の指示に際し、数字に誤植の起ることは避けがたいところであるが、利用者に不便と不安をかゝす恐れがある。序文の中で気づいた若干の場合をここに附記する。

頁	行	正	誤
LXV	23	12. 9	11. 9
"	25	15. 10	15. 20
"	26	20. 4	19. 4
"	27	19. 8	18. 8
"	28	8. 4	7. 4
LXXI	18	6. 13	6. 1
LXXXIII	下から 5	1. 5	1. 4
LXXXVI, n. 2		22 nd	23 rd

ヴェーダ祭式の研究は、ちきと J. M. van Gelder 博士によるマーナヴァ・シュラウタ・スートラの出版・翻訳を得

今さらに Bh 派に属するスートラ三種の出版・翻譯によつて恵まれた。このようにして重要な欠陥は次々に補われ、研究はいよいよ総合的段階にはいつたと言ひ得る。この要求にこたえる集大成、カーシカル博士ならびに R. N. Dandekar 教授の Śrautakośa の出版が、順調に進捗していることは研究者の意を強くする。しかし文献学的祭式研究のなすべきことはなお多い。カーシカル博士が今後ますます斯学の進歩に貢献されんことを切望する。

(The Śrauta, Paitrmedhika and Parisēsa Sūtras of Bharadvāja. Critically edited and translated by C. G. Kashikar. Part I: Text, XCVI, 372 pp.; Part II: Translation, 526 pp.; Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, Poona, 1964.)

長沢和俊著

チベット 極奥アジアの歴史と文化

山口 瑞 鳳

或る国について総括的な記述を試みようとするとき、その国以外の人々によつて書かれた見聞記の類のみを手がかりにして事を論じてはなかなか正鵠は期しがたい。今、自分が取

上げようとする問題を、その国の人々が嘗てどのように見て来たか、現在どのように見ているかということを知らなくては議論が奇妙な方向に発展する危険がある。亦、然るべくしてあることと偶発的なことがらとを区別するにも、その国の人々がその事実を認知しているか否かを知らなくてはならない。

行きずりの旅行者の記録にはもとより、かなり長く滞在した人々の間にでも、その国の人々が当の問題に対して示した見解などを顧みない場合、屢々群言に語られた象の印象の如きものが述べられているのが認められる。

旅行者の記録などを素材として、これらの取捨選択を成可く誤らないためには、その国の人々によつて書かれた各種の文献に出来るだけ多く接し、自らその国の総体について一般より正確な概念をもつことが必要である。出来れば、その国に長く滞在してそれらのことを確かめる機会をもつことが望ましい。その他の場合、少くとも、その国についての学問的な研究成果を参照する努力を怠つてはならない。

素材を選択するに必要な準備を欠いて、単に素材を適当に按配して示すことは、誤つた見解も右から左へ伝えられる危険が多いため、決して願わしいことと云えないであらう。

長沢氏の「チベット」は、非常にたくみにチベットに関する事柄を按配し、読み易く便利な書物にまとめあげたもので